Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-03

日中両言語の受身の使用実態と対応関係及びそれに基づく中国語母語日本語学習者の受身の誤用分析

陳, 婧璇

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2020-03-25
(Date of Publication)
2021-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7644号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007644

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式３）

論　文　要　旨

氏　名　陳　婧璇
専　攻　グローバル文化
指導教員氏名　湯淺英男

論文題目
日中両言語の受身の使用実態と対応関係及びそれに基づく中国語母語日本語学習者の受身の誤用分析

論文要旨

本研究では、まず統語論的及び意味論的認知論的観点から日中両言語の受身の使用実態の分析を試みる。その際、日本語と中国語において受身文がどのように使われているのかを、志波(2015)の受身タイプの分類を適用し、日中それぞれ３作品の小説に、日本語オリジナル作品の中国語訳、中国語オリジナル作品の日本語訳も加えて分析すると共に、地の文、会話文に分けて分析することも行った。そして日本語と中国語の受身文がどのような対応関係を持っているのかを明らかにした。さらにそれらの分析結果に基づいて、中国語母語話者日本語学習者の受身の使用事態と誤用を分析・考察し、中国語母語話者日本語学習者にとっての学習上の注意点を指摘した。以下、具体的に述べていく。まず、日本語と中国語の受身については、以下のように定義する。

日本語記述文法研究会（2009）によると、日本語の受身とは動作による働きかけや作用を受ける人や物を主語として文を構成することである。受身文の述語は、動詞の語幹「-(r)are-ru」という接辞を付加して作られ、事態の描き出し方としては有標であることを表している。

他方、中国語の受身はマーカーのない受身文とマーカーのある受身文の２タイプに大きく分けられる。マーカーのない「意味上の受身」は、劉ほか（2001）によると、動作の受け手が動作の影響を受けた場合に、多く用いられる。受け手を主語の位置に置き、述語をその後に置く。動作の仕手が文中に現れる場合は受け手の後ろに置かれる。例えば、房间打扫干净了。（部屋はきれいに掃除された。）一方、マーカーのある受身文は、次の２タイプに分けられる。一つは「受」類の動詞を用いた受身。例：太郎受到了老师的高度评价。（太郎は先生から高く評価された。）（中島,2007）もう一つは前置詞「被、叫、让」を伴う受身文である。このような受身文を木村（1992）は以下のように定義している。つまりそれは主語の位置に、動作の影響を被る対象を表す構成素が立ち、動作の担い手を表す構成素が前置詞「被、叫、让」のいずれかに伴われて、非主語の位置に立つタイプの構文である。例:椅子让小王拉倒了 。（椅子が王君に引き倒された 。）

また、日本語受身文の分類・分析方法としては、志波（2015）の分析方法に従う。志波（2015）は小説の会話文、小説の地の文、新聞の報道文、評論文という４つのテクストから、日本語受身文を抽出し、語彙・構文論的にそれぞれの受身構文の特徴を記述・分析した。分類方法としては、まず主語と動作主の有情・非情の別に基づいて大きく４つに受身構文を分類した上で、その４つの分類を軸に、動詞のカテゴリカルな意味とその構造的特徴によって、４種類を１７タイプに下位分類した。その 17 タイプの分類をそれぞれ意味と構造的特徴に基づいてさらに細かく分類した。結果として全部で 73 タイプになっている。中国語受身文の分類においても日本語の受身文との対応のしやすさを考慮して、志波（2015）の分類方法を参考にする。

分析資料としては、『重力のピエロ』、『火花』『ツナグ』という３つの日本語小説とそれらの中国語訳及び、『さよなら、ビビアン』『五星大飯店』『三体』という３つの中国語小説とそれらの日本語訳、計 12 冊の小説（日中各オリジナル作品及びそれぞれの中国語訳ないしは日本語訳含め）を用いるが、地の文と会話文は分けて分析・考察を行った。これらの作品は、志波(2015)の分析対象より、より最近の出版年となっている。

日本語受身文については、第４章において、日本語受身文の多く使われているタイプが、I 状態変化型、I 位置変化型、I 結果型、AA 評価動作的態度型、AA 相手への発話型、AA 社会的変化型、I 実行型となっていることを結果として明らかにした。

中国語受身文については、第５章で、志波（2015）の分類基準を参考に分析と考察を行った。その結果、中国語の「被」などを用いたマーカーのある受身文においては、I 状態変化型、AA 評価動作的態度型、AI 心理的状態型、AA 社会的変化型、AA 接触型などが多く用いられることを明らかにした。また、中国語のマーカーのない「意味上の受身文」の９割以上が非情一項受身文となっており、特にI状態変化型とI位置変化型が多く見られた。「受」などの本動詞を用いた受身文については、分析結果から AA 態度型が多いように見られる。

さらに、日本語受身文と中国語受身文との対応関係については、第６章において分析した。そこでは、日本語と中国語で多く使われているI状態変化型とI位置変化型が相互に対応していないことがわかった。つまり、この２つのタイプの日本語受身文は中国語受身文への訳出割合がそれほど高くない。逆に、この２つのタイプの中国語受身文は日本語受身文への訳出割合が高いとも言えない。また、日本語で多く使われている I 結果型の受身文は、中国語の受身文としては出現しにくいことも明らかになった。一方、中国語の意味上の受身文は日本語受身文と対応しやすいが、中国語の意味上の受身文は中国語の能動文と同じような形式を持っているため、日本語学習の観点に立てば、中国語母語の日本語学習者の受身学習への干渉の可能性が考えられる。さらに、中国語母語の日本語学習者の受身の「不使用」誤用に関しては、I 結果型、I 状態変化型、I 思考型などが多く見られた。中国語母語の日本語学習者の受身の「過剰使用」誤用については、知覚・思考、状態変化、生産・作成に関わる動詞を用いた文において多く見られた。それらの誤用については、母語の干渉や自他動詞の未習得などの誤用原因が考えられる。今回の中国語受身文についての調査・考察に関しては、「被」などのマーカーのある受身文を中心に行った。意味上の受身文と「受」などの本動詞を用いた語彙的受身文と、日本語受身文との対応関係についての詳細な分析に関しては、今後の課題としておきたい。また、今回の調査では、受身を含む形式が名詞の連体修飾になる場合が多く見られたが、単文に変換して、被修飾名詞がガ格になる受身のケースしか扱っていない。被修飾名詞が変換後にガ格になっていない受身の連体修飾の例についても、課題として残っている。さらに、中国語母語学習者の誤用分析については、今回の調査では作文コーパスを利用したが、今後はさらに実験なども行い、誤用の原因をより多角的に検証したい。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏　　名	陳　婧璇
論　文　題　目	日中両言語の受身の使用実態と対応関係及びそれに基づく中国語母語日本語学習者の受身の誤用分析
判　　定	(合　格)　・　不　合　格
論文チェックソフトによる確認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：

審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委員長	教授	藤濤　文子
	委　員	教授	湯浅　英男
	委　員	教授	康　敏
	委　員		印
	委　員		印

要　　旨

別紙のとおり

本論文は、まず日本語オリジナル小説『重力ピエロ』『ツナグ』『火花』の３作品とその中国語訳書、及び中国語オリジナル小説『告別薇安』『五星大饭店』『三体』の３作品とその日本語訳書、計 12 冊を分析対象に、志波によって 73 にまで下位分類された受身文の統語論的意味論的タイプを適用し、日中両言語の受身文それぞれについて地の文と会話文に分けてタイプ別の使用実態の分析を試み、その上で日中の受身文が相互にどのような言語形式で対応関係を持つかを探った極めて詳細かつ実証的な研究である。さらにこうした日中受身文の比較的対照的研究で得た知見の上に、中国人日本語学習者の作文コーパスを用いて、受身文の誤用の原因について根拠ある説明を行っており、粘り強い独創的な研究として高く評価できる。本論文は、以下の９章から成る。

第１章の「はじめに」では、近年現代日本語の受身文を体系的類型的に研究する方向性が打ち出されていることを背景に、本研究の立場と研究目的が述べられる。第２章では日中受身文の先行研究が簡潔にまとめられるが、特に中国語の受身文を「被、叫、让」といったマーカーのある受身文、マーカーのない意味論的な受身文、「受」類の動詞を用いた受身文の３種に分け、日中受身文の比較の要に用いていることが本論文に独自の視点を与えている。第３章では、日中受身文の使用実態、訳本に基づく受身文の相互の対応関係、受身文の日本語教育を論点にして、問題提起がなされる。第４章では当該小説内からの日本語受身文の抽出と類型論的分類、量的分析によって、地の文ではⅠ状態変化型、Ⅰ位置変化型、会話文ではⅠ状態変化型、Ⅰ結果型などの出現頻度が高いことが明らかにされる。また第５章では中国語の「被」のマーカーのある受身文が取り上げられ、地の文ではⅠ状態変化型、Ⅰ位置変化型、また会話文ではⅠ状態変化型、AA 評価動作的態度型の出現頻度が高いことが示される。地の文及び会話文を通して、非情物を主語とする１項受身文が多用されていることや、Ⅰ状態変化型、Ⅰ位置変化型の出現頻度が高いことなど、日中受身文に共通した特徴が実証的に示される。因みにⅠは「非情物(inanimate)」、Ａは「有情物(animate)」で、１項表示の場合及び２項表示の１項目は、主語の意味内容を、２項表示の２項目は、「～に（よって）」内などの名詞句の意味内容を指す。さらに第６章では、日中受身文の対応関係が相互の訳文の分析から解明され、両言語の受身文で頻出するⅠ状態変化型、Ⅰ位置変化型は相互に受身文として対応するのが困難なこと、それに対し中国語の意味上の受身文は日本語の受身文と対応しやすいことなどが明らかにされる。第７章では、上記の分析を踏まえて、中国人日本語学習者の作文コーパスを用いて、日本語の受身の助動詞「（ら）れる」の不使用・過剰使用を分析し、不使用では、中国語の無標形式の受身文の干渉、過剰使用では知覚・思考動詞の自発の「（ら）れる」の影響などを、独自の観点から論理的に分析している。第８章では上記の考察に基づいて日本語教育への提言がなされ、第９章の「終わりに」では今後の課題が述べられる。

なお本論文に先立ち、「日本語教育と日本語学国際シンポジウム」をはじめ、２つの国際シンポジウムでの発表や、関係論文の日本認知言語学会機関誌への掲載もあり、学会への学術的貢献も果たしていると認められる。

本論文は日中両言語の受身文について、日本語及び中国語のオリジナル小説、及びそれぞれの中国語訳、日本語訳を対象に、日中の受身文の使用実態及び用法、対応関係の異同について、中国人日本語学習者の誤用の分析をも視野に入れながら統語論的意味論的認知論的に研究したものであり、日中受身文の用法解明に重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の陳婧璇は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。